

## ミュージザ拠点の東京交響楽団

東日本大震災で被害を受け、利用再開の見込みが立たないミュージザ川崎シンフォニーホール（川崎市幸区）。同ホールを拠点とする東京交響楽団も、活動に大きな影響を受けているが、「負けないで頑張っていていきたい」と前を向き、市民に演奏会への来場を呼び掛けている。（北条香子）

震災被害ホール  
復旧めど立たず

同ホールは三月十一日の本震で、客席上部の天井の仕上げ材や鉄骨が落下。余



天井建材などが崩落したミュージザ川崎シンフォニーホール

# 「この地で演奏したい」

## 会場代え公演続ける

震で被害が拡大し、阿部孝夫市長は十一日の会見で「状態は大変厳しい」との見解を示した。復旧工事のめどは立っていない。東響は二〇〇二年に川崎市とフランチャイズ提携し、〇四年の開館時から同ホールを練習拠点に、定期演奏会を開いてきた。世界でも折り紙付きの音響の良さを誇った同ホールを拠点にすることで楽団員の力が

より引き出され、「音色が明るくなった」などと、国内トップクラスの評価を得るようになった。

大野順二楽団長は「音楽家にとってホールは家であり、楽器の一部でもある」と表現する。それだけに同ホールの被災は、楽団に大きな衝撃を与えた。ミュージザ以外のものも含め、二十公演が中止に追い込まれた。演奏収入を失い、「今後どうなっていくのか、不安でしょうがなかった」と大野さんは振り返る。

先月二十六日、震災後初めての演奏会を都内で開いた。九十人の楽団員の中には被災地出身者もいる。大使館から国外退避を勧められた外国人奏者もいたが、とどまった。渡航自粛勧告を受け、オランダ人音楽監督は来日できなかったが、開演三日前のリハーサルで久しぶりに顔を合わせた楽団員は「一人で練習していたても余震で集中できなかった」と、そろって演奏できるとの喜びを分かち合ったという。

このほかにも、「この七年間、川崎市民の応援を受けてきた。これからもこの地で演奏したい」という東響の強い気持ちを受け、市や川崎市文化財団が奔走。同ホールで予定していた公演は、洗足学園前田ホール（高津区）や昭和音楽大テアトロ・ジューリオ・シヨウワ（麻生区）など市内のホールで開催できることになった。



閉鎖中のミュージザ川崎シンフォニーホール前で「負けないで頑張っていていきたい」と語る大野順二さん＝いずれも幸区で

来月三日には、ゼロ歳児から来場可能な演奏会が市教育文化会館（川崎区）に会場を移して開かれる。大野さんは「放射能汚染などへの心配で、お母さんたちもストレスがたまっている。音楽にはすごい力がある。みんなに元気を与えたい」と力を込めた。問い合わせはチケットセンター＝電（520）1511へ。